

保育所における自立的な問題解決行動を維持する支援システムの検討

—新たな内部コンサルタントの育成—

原 康行

井澤信三

1 研究目的

近年、障害児保育の領域において、外部専門家が保育所を訪問し、特別な支援が必要な子どもたちへの支援や指導方法を助言する「巡回相談」事業（森，2010）が定着してきた。このような相談形態は「コンサルテーション」と呼ばれ、外部支援者が直接的に園児に関わるのではなく、園児に関わる保育士等の相談者に対して、問題を評価・整理し、解決に向け、相談者の力量を引き出す支援活動を指す（後上，2010）。

保育所における巡回相談は、有力な支援方策の一つとなり（浜谷，2006）、問題への解決案や支援方法を提供し、保育士の不安を軽減してきた（井戸，2008）。一方で、外部支援者への依存性の高さ（鶴，2012，後上，2010）等が指摘され、浜谷ら（1990）は、単発的な巡回相談が必ずしも保育士の問題解決力向上に効果を発揮しないことを示している。

これらの課題に対し、外部支援者への依存性を低減し、保育所内部で自立的に問題解決を進める方法として、保育所内部の人材を、内部コンサルタント（以下「内部Co」と示す）として育成し、担任保育士の問題解決力を向上させる方法を提案した（原，投稿中）。結果、担任保育士は「具体的な支援」案の産出につながる「問題分析」の発話を増やし、内部Coは問題解決を進める支援会議を運営できることが明らかになった。課題として、内部Co一人に依存するのではなく、内部Coを中心に、相互に支え合い、問題解決力を高めていく方法の検討が求められた。

そこで、本研究では、これまで外部支援者による支援を受け、問題解決力を高めてきた内部Coが、新たな内部コンサルタント（以下「新内部Co」と示す）を育成する手続きについて検証を行った。

2 研究方法

1) 対象

X 県 Y 市の全 15 園の保育所に研究協力の依頼を行い、応募のあった私立保育所 2 施設を対象とした。

(1) A 保育所

①園の概要

研究開始時の 20XX 年 4 月の総園児数は 83 名、特別な支援を必要とし、診断を受けた園児は 1 名であった。クラス数は 5 クラスで、保育士数は 16 名であった。

②対象者

担任保育士 A-1（以下「新 Co A-1」と示す）、主任保育士 A-2（以下「新 Co A-2」と示す）の 2 名を新内部 Co として位置づけた。

新 Co A-1 は、30 代、女性、保育士歴 16 年、担任保育士であった。1 年次に支援会議対象クラスの担任保育士として、外部支援者が会議進行した 3 回の支援会議と、その後、内部 Co A-A が進行した 3 回の支援会議、計 6 回への参加経験を有していた。新 Co A-1 は、本年度、自らが会議進行した対象クラスの保育には直接的に関わらない立場にあった。

新 Co A-2 は、30 代、女性、保育士歴 8 年、主任保育士 2 年目であった。1 年次に支援会議対象クラスの担任保育士として、内部 Co A-A が会議進行する計 3 回の支援会議への参加経験を有していた。直接的に園児への保育は担当せず、クラス間の事務的な調整などを行う役割であった。

内部 Co A-A は 40 代、女性、保育士歴は 29 年、主任保育士を 7 年経験し、園長 2 年目であった。

外部支援者は、第 1 執筆者であり、教員歴 22 年の特別支援学校教員で、保育所等に対し、応用行動分析学に基づくコンサルテーションを行っていた。

③対象クラス

3歳児クラス、4歳児クラスを対象とした。

3歳児クラスは、23名、特別な支援を必要とする園児はいなかった。担任保育士は3名で、主担任は50代、女性、副担任は50代、女性、30代、女性であった。新Co A-1がこのクラスの支援会議を進行した。

4歳児クラスは、20名、特別な支援を必要とする園児は1名、ダウン症の診断を受けていた。担任保育士は2名で、主担任は40代、女性、副担任は50代、女性であった。新Co A-2が、このクラスの支援会議を進行した。

④介入期間

20XX年7月から翌年2月であった。支援会議は7月に第1回、翌年2月に第2回を実施した。

(2) B保育所

①園の概要

研究開始時の20XX年4月の総園児数は100名、特別な支援を必要とし、診断を受けた園児は1名であった。クラス数は5クラスで、保育士数は14名であった。

②対象者

主任保育士B-1（以下「新Co B-1」と示す）を新内部Coとして位置づけた。

新Co B-1は、40代、女性、保育士歴22年、主任保育士1年目であった。1年次、支援会議対象クラスの担任保育士として、外部支援者が進行する3回の支援会議と、内部Co B-Bが進行する3回の支援会議、計6回への参加経験を有していた。本年度は、直接的に園児への保育は担当しない立場の主任保育士であった。

内部Co B-Bは40代、女性、保育士歴は23年、主任保育士歴5年であった。

外部支援者は、A保育所同様、第1執筆者であった。

③対象クラス

4歳児クラスを対象とした。人数は16名、特別な支援を必要とする園児はいなかった。担任保育士は1名で、30代、女性、であった。新Co B-1がこのクラスの支援会議の進行を行った。

④介入期間

20XX年6月から12月であった。支援会議は6月に第1回、第2回、7月に第3回、11月に第4回を実施し、合計4回であった。

2) 倫理的手続き

研究開始前に、両保育所の所長と参加保育士に、①研究目的と方法等の概要、②ビデオ撮影による保育場面や支援会議の記録、③研究への参加協力が本人の自由な意思に基づき行われ、途中でも取りやめられること、その際に不利益を被らないことについて、書面と口頭で説明し、承諾を得た。

3) 手続き（表1参照）

(1) これまでの介入手続き

①1年次の介入

A保育所、B保育所とも、1年間に全9回の支援会議を行った。全9回を3期に分け、第1回から第3回を第1期、第4回から第6回を第2期、第7回から第9回を第3期とした。

第1期は外部支援者が会議進行し、対象クラスの特別な支援を必要とする子どもへの支援方法を解説し、支援案を検討した。会議で話された内容から支援を見出す際にポイントとなる「支援の視点」を各会議でまとめ、参加者間で共有した。第1期に、各保育所とも7つの「支援の視点」としてまとめた（表2、表3）。

第2期は、外部支援者にかわり、内部Coが「支援の視点」に基づき、支援会議を進行した。

第1期、第2期の会議参加者は、外部支援者、内部Co、担任保育士であり、B保育所は各回入れ替わりで他クラスの担任保育士も参加した。A保育所 新Co A-1、B保育所 新Co B-1が、当時の対象クラスの担任保育士として参加していた。

第3期は、第1期、第2期とは異なるクラスを対象とし、全3回の支援会議を実施した。内部Coが会議進行し、外部支援者は会議に参加しなかった。会議参加者は、内部Co、担任保育士、両保育所とも各回、入れ替わりで他クラスの担任保育士が参加した。A保育所 新Co A-2が、当時の対象クラスの担任保育士として参加していた。

表1 各年度における介入手続き

介入年度	支援会議	A保育所	B保育所	
1年次	全9回	第1期(第1回～第3回) 外部支援者が会議進行し、「支援の視点」をまとめる。新Co A-1, 新Co B-1が担任保育士として参加。 第2期(第4回～第6回) 内部Coが「支援の視点」に基づき、支援会議を進行。新Co A-1, 新Co B-1が担任保育士として参加。 第3期(第7回～第8回) 内部Coが「支援の視点」に基づき、支援会議を進行。新Co A-2が担任保育士として参加。		
2年次		3, 4, 5歳児の各クラスを対象に、A保育所は年間4回、B保育所は年間6回の支援会議を実施。第1回、第3回に外部支援者が参加。他の回は保育所内の職員のみで実施。内部Coが「支援の視点」に基づき、支援会議を進行。新内部Coは担任保育士として参加。		
3年次		3, 4, 5歳児の各クラスを対象に、両保育所とも年間3回の支援会議を実施。外部支援者は第2回のみ会議に参加し、職員のみで実施した第1回、第3回には電子メールで助言。内部Coが「支援の視点」に基づき、支援会議を進行。新内部Coも参加。		
		3歳児クラス	4歳児クラス	
本年度	第1回	新Co A-1が会議進行。	新Co A-2が会議進行。	内部Co B-Bが会議進行し、見本を提示。
	第2回			
	第3回	新Co B-1が会議進行。		
	第4回			

※グレーの網掛け部分は、分析対象とした支援会議を示す

② 2年次の介入

A保育所は、3歳児、4歳児、5歳児のクラスで年間各4回の支援会議を実施した。第1回、第3回に外部支援者が参加し、残り2回は保育所内の職員のみで実施した。B保育所は、3歳児、4歳児、5歳児のクラスで年間各6回の支援会議を実施した。第1回、第3回に外部支援者が参加し、残り4回は保育所内の職員のみで実施した。支援会議の進行は各保

育所の内部Coが行い、1年次にまとめた「支援の視点」をもとに各クラスの支援案を検討した。各保育所の新内部Coも担任保育士として参加した。

③ 3年次の介入

両保育所とも、3歳児、4歳児、5歳児の各クラスで年間3回の支援会議を実施した。2年次同様、各保育所の内部Coが会議を進行し、1年次にまとめた「支援の視点」をもとに各クラスの支援案を検討し

表2 A保育所「支援の視点」の説明と具体例

支援の視点	説明と具体例
a. 活動しやすい、わかりやすい環境	人的支援だけに頼らず、物を用いて視覚的に支援する。(具体例) 実物、写真、絵カード、スケジュールボード、等。園児が求められる行動を起こしやすい動線や物の配置を工夫する。(具体例) 園児同士が交差しない、最短距離の動線。
b. たくさんの活動機会の設定	教示・説明時間をなるべく短くし(5分をめど)、実際の活動時間を増やす。活動機会を増やし、成功体験を多く積む。(具体例) 同じ活動を3回以上行う。
c. 保育士の位置取りと役割の明確化	主指導者は、子どもたちが見やすい、決まった位置から教示、手本を示す。副指導者は、子どもの後ろに位置し、主指導者の説明や手本への注目を援助する。(具体例) 園児に働きかけるために接近した後、また決まった位置に戻る。
d. 活動ルールの明確化	クラスでの活動ルールを明確に示す。日々変更しない。ルール変更時は、視覚的支援を用い伝える。(具体例) 保育士の「はい!」の合図で活動を始める。外遊びから帰ってきた時の手順(手洗い→帽子片付け→お茶→トイレ)。
e. 保育士の役割を園児に移行する	保育士が行っている、活動の準備作業、後片付けを園児が手伝い、次第に園児の活動として移行する。準備作業により活動への見通しを持ち、片付け作業で切り替えの力等を育てる。みんなのために協力し活動する力や価値観を養う。(具体例) サーキット運動の準備時、道具を運び始める地点と設置位置に各保育士が立つ。一緒に運ばない。運んできてくれたら「手伝ってくれてありがとう。助かるよ。」と声をかける。
f. 自ら環境を整える方法を身につける	活動しやすい環境を園児自らが整える方法を教える。(具体例) 話を聞くときは、先生の方に椅子を向け座る。本を片付ける時は片方の手で隙間を作って入れる。
g. 具体的な評価	活動前に目標を示す。活動中に目標に向け頑張っている姿を褒める。活動後、目標に即して評価する。集団全体ではなく、個別的、具体的に評価する。(具体例) 「今日は、たくさんすることが目標です。」「○○くん、丁寧に取り組んでいるよ。」

表3 B保育所「支援の視点」の説明と具体例

支援の視点	説明と具体例
a. 視覚的支援の充実	ことばだけで指示するのではなく、視覚的な支援を用い伝える。内容や順番を変更する場合、スケジュール表の活動カードを実際に入れ替えるなどの操作を行い説明する。(具体例) スケジュール表、絵カード、ご褒美シール、歌詞カードなど。
b. 物、人の配意と役割の明確化	園児の活動に合わせ、物の配置、保育士の位置取りを工夫し、求められる行動を起こしやすい環境を設定する。支援位置での保育士の支援方法を明確にする。(具体例) 園児が交差しない動線。園児から保育士に近づき支援を求める。
c. 「わかる」支援	「いっ」「どこで」「誰と」「何を」「どの手順で」「どれだけ」行いかを示し、安心して学べるようにする。(具体例) 視覚的支援等も併用し、項目内容を伝える。
d. 「できる」支援	人的支援を受けずとも、一人でできるように物での支援(教材の工夫、支援ソールの活用)を行う。(具体例) 補助具、教材のスマールステップ化、など。
e. たくさんの活動機会	回数を多く取り組むことで、取り組み内容を理解し、技術の上達を促す。上達すると、園児自身が工夫を始めたり、友だちと協同する場面が生まれる。(具体例) 活動は1回で終わらず、同じものを3回以上繰り返して行う。園児が工夫し、取り組みを発展させやすいよう、様子の異なる材料や道具等を準備する。
f. 具体的な評価	活動前に評価ポイントを示す。活動中、友だちの頑張りに目を向けられる声かけを行う。活動中、活動後、保育士が個別的、具体的に園児を褒める。(具体例) 「○○チーム、大きな声がかっこいい。」「○○くんは、優しい声で歌っていました。」
g. 明確なルールの提示	毎日、変更されないルールにより安心し、主体的に取り組む方向かえる。(具体例) 移動時は2列に並ぶ。お返面は両手で受け取る。朝の会での活動順は固定する。

た。新内部 Co も参加した。第 2 回のみ外部支援者が参加した。第 1 回、第 3 回は保育所内の職員のみで実施し、外部支援者は保育ビデオと支援会議の記録ビデオを視聴後、電子メールにて助言を行った。

(2) 本年度の介入手続き

① 支援会議の方法

A 保育所では、計 2 回の支援会議を実施した。会議進行の見本提示は行わず、新 Co A-1、新 Co A-2 それぞれが、各クラスにおいて 2 回の会議進行を行った。

B 保育所では、計 4 回の支援会議を実施した。第 1 回、第 2 回は、内部 Co B-B が会議進行を行い、新 Co B-1 に会議進行の見本を提示する手続きを加えた。内部 Co B-B は、後述する「1 回の会議での進行手続き」にもとづき会議進行を行った。第 3 回、第 4 回も、同じクラスを対象に新 Co B-1 が会議を進行した。

新内部 Co が会議進行する初回の、A 保育所第 1 回、B 保育所第 3 回のみ、外部支援者が参加した。外部支援者は支援案の妥当性を確認するために参加し、積極的な発話は行わない手続きとした。その他の回は保育所内部の職員で実施し、参加者は内部 Co、クラス担任保育士、他クラス担任保育士が参加した。支援会議は、保育所内の職員研修の機会の一つとしても設定されていることから、勤務シフト上、参加可能な他クラス担任保育士が入れ替わり参加し、参加人数も異なった。

② 1 回毎の支援会議の共通手続き

a. 1 回の支援会議の概略

会議始めに、事前に撮影した保育ビデオを 5～6 分間、視聴し、参加者間で、場面や状況、園児の行動等の事実を共有した。その後、問題分析を行い、支援方法を話し合った。会議時間は 1 時間までを目安とし、お昼寝時間や園児降園後の勤務時間内に実施した。

b. 支援会議の事前手続き

イ. 保育ビデオの撮影：担任保育士が観察を求めた保育場面を会議進行者がビデオ撮影した。朝の会やリズム運動など 1 つの活動を対象とした。撮影方法は、園児や保育士と周囲の環境との関係性を把握するため、特定の人物や物だけを撮影せず、定点から俯瞰的に

撮影した。

ロ. チェック項目（目標支援行動）の設定：担任保育士は、自らの目標支援行動を設定し、「チェック項目」とした。支援会議の中で、会議参加者がその「チェック項目」にそって、支援を評価することにも活用した。

ハ. 事前打ち合わせ：支援会議前に、内部 Co と新内部 Co の二者で、視聴ビデオの場面選定と、問題状況の確認を 10 分程度で行った。内部 Co は、新内部 Co の問題分析や支援方法の方向性について意見を聞き、簡単なアドバイスをを行った。ビデオ場面は、担任保育士の「チェック項目」に対応する場面を含むこととした。

c. 支援会議時の手続き

イ. 1 回の会議での進行手続き：大橋ら（2009）、小栗（2014）が示す「問題状況の共有」「問題分析」「支援案の立案」の発話プロセスに基づき、1 回の会議においても必ず「具体的な支援」案の産出に至る進行手続きを設けた。

「問題同定」：事前に撮影した保育ビデオを視聴し、担任保育士が気になる園児の行動（友だちとのトラブル、集団参加ができにくい、場面を切り替えられないなど）を共有した。保育士が「チェック項目」で示した支援行動が行えていたか、支援行動と園児の行動との関係、周囲の環境との関係性についても確認した。

「具体的な支援」の検討：「問題同定（状況共有・問題分析）」をもとに「具体的な支援」について話し合った。その際、1 年次にまとめ、2 年次以降も活用してきた「支援の視点」を手がかりとした。

d. 支援会議の事後手続き

イ. 事後打ち合わせ：支援会議終了後、先ず、外部支援者と内部 Co の二者で、支援案の妥当性や会議進行について意見交換した。その後、内部 Co、新内部 Co の二者が「具体的な支援」案の産出と妥当性、会議進行について話し合った。外部支援者が参加しない回は、内部 Co と新内部 Co のみの打ち合わせを行った。

ロ. 支援会議内容の報告：支援会議の内容を、職員会議での報告や資料回覧を通し、全保育士に伝えた。

4)分析方法

(1)支援会議の発話分析

①発話分析の概略

支援会議をビデオ撮影し、会議内の発話を逐語録に起こした。発話量は、テキスト化した文字数により数値化し、発話内容は、大橋(2013)、小栗(2014)の研究を参考に設定したカテゴリーに分類した。1つの発話に複数のカテゴリーが含まれる場合は、発話を内容で区切り分類した。参加者の発話内容と、その量の変化を分析した。

②対象

分析対象とした支援会議は、新内部 Co が司会進行を行った回とし、A 保育所は、第1回と第2回、B 保育所は第3回と第4回とした。

③発話カテゴリーの設定(表4参照)

「方法説明」「問題同定」「解決案」「会話促進」「質問」5つの上位カテゴリーと各下位カテゴリーを設けた。「方法説明」は「会議の目的・方法」「支援の視点」の2つ、「問題同定」は「状況共有」「問題分析」の2つ、「解決案」は「具体的な支援」「視点提供」「整理」「同意」の4つ、「質問」は「オープン」「クローズ」の2つ、「会話促進」の下位カテゴリーはなかった。

④分類手続き

カテゴリーの分類作業は、第1筆者を含む、特別支援学校教員免許を有し、保育支援活動を経験した修士

課程修了者2名が実施した。評定項目の共通理解と統一のため、分類作業前に3つの類似事例で分類練習を行った。その後、検証対象とした6つの会議を対象に、発話全体の30%以上を評定者それぞれがカテゴリー分類した。評定者間の信頼性を検討するため kappa 係数を求めた。各会議の一致率は、A 保育所3歳児クラス第1回 $k = .90$ 、第2回 $k = .84$ 、4歳児クラス第1回 $k = .93$ 、第2回 $k = .83$ 、B 保育所第3回 $k = .87$ 、第6回 $k = .72$ となり、高い kappa 係数が確認された。これらの結果から実質的に一致しているとみなされたため、残る部分の分類は第一筆者のみで実施した。

⑤発話占有率、「支援の視点」との合致率、会議進行カテゴリーについて

支援会議における各参加者の発話文字数を、参加者全員の総発話文字数で割った割合を発話率とした。

「具体的な支援」と「具体的な支援」の産出につながる「問題分析」の2つのカテゴリーでは、発話内容の妥当性をはかるため「支援の視点」項目内容と合致した発話文字数を産出し、割合を合致率とした。

また、「方法説明/支援の支援」「解決案/視点提供」「解決案/整理」は、参加者の「支援の視点」への理解を促しつつ会議を進行する発話であることから、会議進行カテゴリーとした。

表4 支援会議における発話カテゴリー

上位カテゴリー	下位カテゴリー	評定項目	例文 (ピアニカ練習場面)
方法説明	会議の目的・方法	支援会議の目的や進め方の説明、質問 ※当日の進行説明は「会話促進」に分類する	支援会議では、特別な支援を必要とする園児への支援だけでなく、すべての園児が自立的に活動できる支援を考えます。回を重ねるにつれ、少しずつ自分の考えを発言してもらえればと思います。
	支援の視点	「支援の視点」に関する説明、質問 ※当日の事象に関する発話は「解決案」に分類する	ピアニカ練習場面でも、前回取り上げた「支援の視点・多くの活動機会の設定」の視点を活用できます。補足説明すると、園児自身がたくさん活動することで、活動への見通しが持て、自立的に活動できるようになります。
問題同定	状況共有	問題や状況を共有するため説明	ピアニカ練習時、Aくんが隣の友だちとケンカを始めていました。その保育場面は、他の子どもたちも少し落ち着きがない様子でした。
	問題分析	問題や状況のとらえ方の提示	ケンカを始めた場面を考えると、Aくんの班は、友だちのピアニカ演奏を聴く時間が長くなってたのではと考えます。自分が演奏する活動がなく、手持無沙汰になっていたと思います。
解決案 (当日の事象を対象とした発話)	具体的な支援	具体的な支援方法、支援案の提示	次回は、活動機会を増やし、学べる機会を多く設定したいと思います。まずは、全員で同じフレーズを繰り返し演奏したいと思います。
	視点提供	解決に向けた方向性や視点の提示	子どもたちの活動機会や、学びの機会を増やす工夫について考えてみましょう。
	整理	これまでに話された解決案内容のまとめ	たくさん活動することで、技術も向上し、自信もつきます。その上に新しいフレーズの練習を行う手続きですね。「多くの活動機会の設定」が大事だとわかりました。
	同意	解決案に対する同意	その方法は、とても有効に感じます。
会話促進 (進行)		挨拶・相づち・冗談・余談・会議進行発話、内容を明確にする発話	「よろしくお願ひします。」「先生の意見をお話してください。」「そして、どうなりましたか。」「つまり、どういうことですか。」
質問	オープン	自由な考え等を引き出す質問	この場面をどのようにとらえますか?
	クローズ	限定された答えを求める質問	具体的な評価が大事ですか?

4. 結果 (表5, 表6, 表7参照)

1) 新内部 Co の「支援の視点」合致率, 会議進行カテゴリの発話, 会議毎の発話率について

(1) 新 Co A-1 の発話結果 (表5参照)

「問題分析」発話は, 第1回はなく, 第2回は2.4%, 228字, 合致率100%であった。「具体的な支援」は, 第1回6.2%, 800字, 合致率100%, 第2回の発話はなかった。平均合致率は, 各回100%となった。会議進行カテゴリの発話は, 「方法説明/支援の支援」第1回4.3%, 561字, 「視点提供」第2回5.7%, 543字, 「整理」第1回2.6%, 338字, 第2回1.4%, 134字であった。支援会議内の発話率は第1回23.4%, 3038字, 第2回23.5%, 2257字であった。

(2) 新 Co A-2 の発話結果 (表6参照)

「問題分析」発話は, 第1回4.1%, 407字, 合致率50.9%, 第2回5.5%, 683字, 合致率43.9%, であった。「具体的な支援」では, 第1回0.5%, 47字, 合致率0%, 第2回1.6%, 200字, 合致率0%であった。平均合致率は, 各回45.6%, 34.0%となった。会議進行カテゴリの発話は, 第1回, 第2回ともなかった。支援会議内の発話率は第1回18.7%, 1839字, 第2回19.1%, 2378字であった。

(3) 新 Co B-1 の発話結果 (表7参照)

「問題分析」発話は, 第3回1.7%, 84字, 合致率100%, 第4回3.4%, 181字, 合致率100%であった。

「具体的な支援」では, 第3回11.6%, 559字, 合致率100%, 第4回17.7%, 938字, 合致率100%であった。平均合致率は, 各回100%となった。会議進行カテゴリの発話は, 「視点提供」第3回4.8%, 233字, 「整理」第4回3.1%, 163字であった。支援会議内の発話率は第3回26.4%, 1273字, 第4回33.9%, 1796字であった。

2) その他参加者の「支援の視点」合致率について

(1) 新 Co A-1 担当支援会議 (表5参照)

「問題分析」での合致率は, 第1回72.0%, 第2回100%, 「具体的な支援」では70.0%, 100%, 平均合致率70.4%, 100%となった。

(2) 新 Co A-2 担当支援会議 (表6参照)

「問題分析」での合致率は, 第1回70.9%, 第2回100%, 「具体的な支援」では68.3%, 64.9%, 平均合致率69.7%, 86.4%となった。

(3) 新 Co B-1 担当支援会議 (表7参照)

「問題分析」での合致率は, 第3回100%, 第4回94.8%, 「具体的な支援」では71.8%, 100%, 平均合致率76.8%, 96.0%となった。

3) 内部 Co の会議進行カテゴリ, 会議毎の発話率の

表5 A 保育所 新 Co A-1 が会議進行した支援会議における参加者別の発話率・発話文字数・「支援の視点」合致率

		外部支援者		内部 Co A-A		新 Co A-1		その他参加者	
		第1回	第2回	第1回	第2回	第1回	第2回	第1回/4名	第2回/6名
発話率		17.6%	27.4%	43.3%	23.4%	23.5%	31.6%	33.2%	
発話文字数		2281	3561	4150	3038	2257	4110	3183	
方法説明	会議目的・方法	発話率 0.0%	0.0%	16.8%	1.6%	6.4%	0.0%	0.0%	
		文字数 0	0	1613	208	610	0	0	
	支援の視点	発話率 11.6%	3.3%	9.2%	4.3%	0.0%	0.0%	0.0%	
		文字数 1503	428	881	561	0	0	0	
状況共有		発話率 0.2%	0.5%	1.4%	0.0%	0.0%	14.3%	6.1%	
		文字数 20	67	132	0	0	1860	582	
問題同定	問題分析	発話率 0.0%	0.0%	4.6%	0.0%	2.4%	3.2%	12.4%	
		文字数 0	0	444	0	228	414	1186	
		合致量 0	0	444	0	228	298	1186	
		合致率 ---	---	100.0%	---	100.0%	72.0%	100.0%	
問題分析, 具体的な支援	平均合致率	---	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	70.4%	100.0%	
具体的な支援		発話率 0.0%	11.2%	0.0%	6.2%	0.0%	12.9%	14.6%	
		文字数 0	1460	0	800	0	1674	1400	
		合致量 0	1460	0	800	0	1171	1400	
		合致率 ---	100.0%	---	100.0%	---	70.0%	100.0%	
解決案	視点提供	発話率 5.7%	10.4%	0.0%	0.0%	5.7%	0.0%	0.0%	
		文字数 740	1357	0	0	543	0	0	
	整理	発話率 0.0%	0.0%	9.8%	2.6%	1.4%	0.0%	0.0%	
		文字数 0	0	941	338	134	0	0	
	同意	発話率 0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.2%	0.0%	0.0%	
		文字数 0	0	0	0	17	0	0	
会話促進		発話率 0.1%	1.9%	1.4%	8.1%	7.4%	1.2%	0.2%	
		文字数 18	249	139	1052	708	162	15	
質問		発話率 0.0%	0.0%	0.0%	0.6%	0.2%	0.0%	0.0%	
		文字数 0	0	0	79	17	0	0	

※「合致量」「合致率」「平均合致率」は「支援の視点」項目との合致した数値を表す
 ※グレーの網掛け部分は, 「問題分析」「具体的な支援」における「支援の視点」との平均合致率を示す

結果

(1) 内部 Co A-A の結果 (新 Co A-1 担当支援会議)

(表 5 参照)

「方法説明/支援の視点」第 1 回 3.3%, 428 字, 第 2 回 9.2%, 881 字, 「問題分析」第 2 回 4.6%, 444 字, 「具体的な支援」第 1 回 11.2%, 1460 字, 「視点提供」第 1 回 10.4%, 1357 字, 「整理」第 2 回 9.8%, 941 字であった。支援会議内の発話率は第 1 回 27.4%, 3561 字, 第 2 回 43.3%, 4150 字であった。

(2) 内部 Co A-A の結果 (新 Co A-2 担当支援会議)

(表 6 参照)

「方法説明/支援の視点」第 2 回 16.7%, 2083 字, 「問題分析」第 1 回 14.5%, 1425 字, 第 2 回 1.3%, 167 字, 「具体的な支援」第 1 回 3.6%, 354 字, 第 2 回 1.4%, 170 字, 「支援提供」第 1 回 3.6%, 367 字, 第 2 回 1.2%, 147 字, 「整理」第 1 回 4.2%, 415 字, 第 2 回 10.0%, 1248 字であった。支援会議内の発話率は第 1 回 39.7%, 3915 字, 第 2 回 37.1%, 4626 字であ

表 6 A 保育所 新 Co A-2 が会議進行した支援会議における参加者別の発話率・発話文字数・「支援の視点」合致率

		外部支援者		内部 Co A-A		新 Co A-2		その他参加者		
		第 1 回	第 2 回	第 1 回	第 2 回	第 1 回	第 2 回	第 1 回/3 名	第 2 回/7 名	
発話率		2.8%	39.7%	37.1%	18.7%	19.1%	38.8%	43.8%		
発話文字数		279	3915	4626	1839	2378	3817	5450		
方法説明	会議目的・方法	発話率 文字数	0.0% 0	0.0% 0	2.9% 355	1.7% 167	2.5% 315	0.3% 29	0.0% 0	
	支援の視点	発話率 文字数	0.0% 0	0.0% 0	16.7% 2083	0.0% 0	0.0% 0	0.0% 0	4.0% 492	
問題同定	状況共有	発話率 文字数	0.0% 0	9.8% 968	2.1% 257	0.0% 0	2.2% 278	6.2% 607	11.4% 1421	
		発話率 文字数	0.0% 0	14.5% 1425	1.3% 167	4.1% 407	5.5% 683	14.2% 1398	16.3% 2028	
	問題分析	合致量	0	1171	167	207	300	991	2028	
		合致率	---	82.2%	100.0%	50.9%	43.9%	70.9%	100.0%	
問題分析, 具体的な支援		平均合致率	---	85.7%	100.0%	45.6%	34.0%	69.7%	86.4%	
解決案	具体的な支援	発話率 文字数	0.0% 0	3.6% 354	1.4% 170	0.5% 47	1.6% 200	12.5% 1227	10.2% 1276	
		合致量	0	354	170	0	0	838	828	
		合致率	---	100.0%	100.0%	0.0%	0.0%	68.3%	64.9%	
	視点提供	発話率 文字数	0.0% 0	3.6% 357	1.2% 147	0.0% 0	0.0% 0	0.8% 81	0.0% 0	
		整理	発話率 文字数	1.3% 124	4.2% 415	10.0% 1248	0.0% 0	0.0% 0	0.0% 0	1.3% 158
		同意	発話率 文字数	0.0% 0	0.0% 0	0.0% 0	0.0% 0	0.0% 0	0.0% 0	0.1% 14
会話促進	発話率 文字数	1.6% 155	4.0% 396	1.2% 153	12.4% 1218	7.2% 902	4.8% 475	0.5% 61		
質問	発話率 文字数	0.0% 0	0.0% 0	0.4% 46	0.0% 0	0.0% 0	0.0% 0	0.0% 0		

※「合致量」「合致率」「平均合致率」は「支援の視点」項目との合致した数値を表す
 ※グレーの網掛け部分は、「問題分析」「具体的な支援」における「支援の視点」との平均合致率を示す

表 7 B 保育所 新 Co B-1 が会議進行した支援会議における参加者別の発話率・発話文字数・「支援の視点」合致率

		外部支援者		内部 Co B-B		新 Co B-1		その他参加者		
		第 3 回	第 4 回	第 3 回	第 4 回	第 3 回	第 4 回	第 3 回/2 名	第 4 回/3 名	
発話率		26.7%	25.4%	22.5%	26.4%	33.9%	21.5%	43.6%		
発話文字数		1291	1226	1191	1273	1796	1037	2310		
方法説明	会議目的・方法	発話率 文字数	0.0% 0	0.0% 0	0.0% 0	0.0% 0	0.0% 0	0.0% 0	0.0% 0	
	支援の視点	発話率 文字数	0.0% 0	0.0% 0	0.0% 0	0.0% 0	0.0% 0	0.0% 0	0.0% 0	
問題同定	状況共有	発話率 文字数	0.0% 0	0.0% 0	0.0% 0	0.0% 0	0.0% 0	0.7% 33	4.7% 248	
		発話率 文字数	0.0% 0	11.2% 540	11.8% 627	1.7% 84	3.4% 181	3.6% 174	30.4% 1608	
	問題分析	合致量	0	540	627	84	181	174	1525	
		合致率	---	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	94.8%	
問題分析, 具体的な支援		平均合致率	---	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	76.8%	96.0%	
解決案	具体的な支援	発話率 文字数	0.0% 0	12.7% 614	10.6% 564	11.6% 559	17.7% 938	16.7% 808	8.6% 454	
		合致量	0	614	564	559	938	580	454	
		合致率	---	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	71.8%	100.0%	
	視点提供	発話率 文字数	10.4% 502	0.0% 0	0.0% 0	4.8% 233	0.0% 0	0.0% 0	0.0% 0	
		整理	発話率 文字数	16.3% 789	0.0% 0	0.0% 0	0.0% 0	3.1% 163	0.0% 0	0.0% 0
		同意	発話率 文字数	0.0% 0	0.0% 0	0.0% 0	0.0% 0	0.0% 0	0.0% 0	
会話促進	発話率 文字数	0.0% 0	0.0% 0	0.0% 0	8.2% 397	9.7% 514	0.5% 22	0.0% 0		
質問	発話率 文字数	0.0% 0	1.5% 72	0.0% 0	0.0% 0	0.0% 0	0.0% 0	0.0% 0		

※「合致量」「合致率」「平均合致率」は「支援の視点」項目との合致した数値を表す
 ※グレーの網掛け部分は、「問題分析」「具体的な支援」における「支援の視点」との平均合致率を示す

った。

(3) 内部 Co B-B の結果 (新 Co B-1 担当支援会議)
(表 7 参照)

「問題分析」第 3 回 11.2%, 540 字, 第 4 回 11.8%, 627 字, 「具体的な支援」第 3 回 12.7%, 614 字, 第 4 回 10.6%, 564 字であった。支援会議内の発話率は第 3 回 25.4%, 1226 字, 第 4 回 22.5%, 1191 字であった。

5. 考察

1) 1 年次の介入手続きの違いと, 新内部 Co の「支援の視点」合致率, 会議進行カテゴリーの発話について

新 Co A-1, 新 Co B-1 は, 1 年次, 外部支援者が会議進行し「支援の視点」をまとめた 3 回の支援会議と, その後, 内部 Co が会議進行した 3 回の支援会議に担任保育士として参加した。この二人の「支援の視点」平均合致率は, 各回 100% となり, 会議進行カテゴリーの発話も確認された。対し, 1 年次, 内部 Co が会議進行した 3 回の支援会議のみに担任保育士として参加した新 Co A-2 の平均合致率は, 各回 45.6%, 34.0% と 50% を下回る結果となり, 会議進行カテゴリーの発話もなかった。

これらの結果から, 支援方法について議論し「支援の視点」としてまとめた会議と, その後 3 回の会議に参加したことが, 「支援の視点」への理解を深め, 2 年次, 3 年次の取り組みを経て, 本年度の会議進行においても, 「支援の視点」に合致する「問題分析」「具体的な支援」発話や, 参加者に「支援の視点」に沿った発話を促す等の会議進行カテゴリーの発話が行えたのではないかと推察ができた。

新 Co A-2 においては, 「支援の視点」をまとめた支援会議に参加していないだけでなく, 参加した会議回数そのものが 3 回であり, 新 Co A-1, 新 Co B-1 より 3 回少なかった。井戸 (2008) が, 年 1 ~ 2 回とされる一施設あたりの相談回数の少なさを指摘するように, 3 回の支援会議では理解を深めるのに十分な回数ではなかったとも考えられた。また, 新 Co A-2 は, 他の新

内部 Co より保育経験年数が少ないことも指摘できた。

支援への理解を進める 1 年次の支援会議の実施方法や回数が, 「支援の視点」への理解, 会議進行上の発話の産出に影響しているのではないかと考えられた。

2) 会議進行における見本提示の有効性について

B 保育所では, 内部 Co B-B による会議進行の見本提示を 2 回, 実施した上で, 新 Co B-1 が支援会議の進行を行った。対し, A 保育所では, 見本提示は行わず, 新 Co A-1, 新 Co A-2, それぞれが会議進行を行った。1 年次の介入条件が同じ, 新 Co B-1 と新 Co A-1 の発話結果を比較すると大きな差は示されず, 「支援の視点」平均合致率がいずれの回でも 100% であり, 会議進行カテゴリーの発話も見られた。

その他参加者の平均合致率は, 見本提示ありの新 Co B-1, 見本提示なしの新 Co A-1 が進行した支援会議で上昇した。回が進むにつれ, 「支援の視点」に沿った的確な「問題分析」や「具体的な支援」発話を増やす会議が運営されていることが明らかになった。見本提示なしの新 Co A-2 が進行した支援会議でも, 平均合致率は, 69.7% から 86.4% と上昇した。

これらの結果から, 事前の見本提示の有無により, 新内部 Co の「支援の視点」に関する発話に影響することは少なく, また支援会議を重ねる中で, その他参加者の「支援の視点」に沿った発話を増やすことが明らかになった。また, 新 Co A-1, 新 Co B-1 は, 初回から 100% の平均合致率があり, 1 年次に加え, 2 年次, 3 年次の取り組みや介入方法についても更なる検証が必要であると考えられる。

3) 内部 Co の発話と会議運営について

新 Co A-2 が進行した支援会議での発話率では, 内部 Co A-A は, 新 Co A-2 の約 2 倍以上の発話を行っていた。逐語録と照合すると, 「支援の視点」と合致しない発話が続く場合に, 内部 Co A-A がその内容を修正するために, 発話を増やす傾向にあることが分かった。

新 Co A-1, 新 Co B-1 の支援会議においては, 内部 Co の発話率が新内部 Co の 2 倍を超えるものはなかったが, 会議進行カテゴリーでは, 内部 Co の発話率は新

内部 Co より高いことが多く、会議進行が、内部 Co の発話に支えられていることも示唆された。

新内部 Co の育成においては、最終的に内部 Co に全く依存しないことだけを目指すのではなく、援助を受けつつも、新内部 Co が支援会議を運営することや、「指導する側」「指導される側」という一方向な関係性(森, 2010)ではなく、相互に支え合い、相談し合える関係となることも保育所全体の自立的な問題解決行動を維持させる支援システムとして有効であると考えた。

4) 今後の課題

本研究では、1年次の介入方法の違いにより、その後の取り組みを経るなかでも、新内部 Co の育成に違いが生じる可能性について示唆した。しかし、1年次の介入だけでなく、2年次、3年次の介入手続きについても、更なる詳細な検証が求められると考える。CDC Healthy Schools (アメリカ疾病予防管理センター Centers for disease Control and Prevention) は、専門家から支援を受けたものが、新たな人材を育成する手続きとして「The Training of Trainers Model」をまとめ示しており、これらを参考に、新内部 Co の育成については更なる検討が進めることができると考える。

引用文献

井戸ゆかり (2008) 『巡回保育指導員によるコンサルテーションの効果と課題-とくに保育者への支援を通して』東横学園女子短期大学紀要, 42, 35-46.

大橋智 (2013) 『自主シンポジウム53 コンサルテーションがはじまる-現場の実践家とのより良い共有のために-

』特殊教育学研究, 50(5), 583-584.

小栗貴弘 (2014) 『学校コンサルテーションに関するコミュニケーション・モデルの実証的研究-出現する発話カテゴリーの継時的および質的变化の分析-』目白大学人文学研究, 10, 251-263.

鶴宏史 (2012) 『保育所・幼稚園における巡回相談に関する研究動向』帝塚山大学現代生活学部紀要, 8, 113-126.

後上鐵夫 (2010) 『地域支援としての学校コンサルテーション活動とその課題』国立特別支援教育総合研究所教育相談年報 31, 1-6.

浜谷直人 (2006) 『小学校通常学級における巡回相談による軽度発達障害児等の教育実践への支援モデル』教育心理学研究, 54, 395-407.

浜谷直人, 松山由紀, 秦野悦子, 他 (1990) 『障害児保育における専門機関との連携-川崎市における障害児保育巡回相談のとりくみの視点と特徴-』季刊障害者問題研究, 60, 42-52.

原康行 (2020) 『保育所における内部コンサルタントの育成を目的とした継続的・研修的な「支援会議運用モデル」の検討』LD研究 (投稿中)

森正樹 (2010) 『保育・教育現場の主體的課題解決を促進するコンサルテーションの研究-特別支援教育巡回相談の失敗事例の検討から-』宝仙学園短期大学紀要, 35, 39-49.

CDC Healthy Schools (Centers for disease Control and Prevention) 『Understanding the Training of Trainers Model』, (https://www.cdc.gov/healthyschools/professional_development/documents/17_279600_TrainersModel-FactSheet_v3_508Final.pdf) 2020年4月30日アクセス